



日本胆道学会理事長

乾 和郎

はじめに

日本胆道学会は創立50周年を迎えたが、この歴史と伝統のある学会の理事長を務めていることの責任の重さを改めて実感している。また同時に、学会を支えてきていただいた諸先生に心から感謝の意を表したい。本学会の歴史については名誉会員・特別会員の先生方がそれぞれのお立場で執筆されているが、ここでは学会全体の流れと現状について報告する。なお、昭和40年に開催された「胆のう造影研究会」から昭和61年に日本胆道学会が設立されるまでの経緯と歴史については、故亀田治男先生が「胆道」1巻1号(15-22頁)に詳細に報告されているので、ぜひ参考にしていただきたい。

学術集会

日本胆道学会として初めての学術集会(第23回)は昭和61年8月、小野慶一先生が会長を務められた。また、記念すべき第50回学術集会は平成26年9月、五十嵐良典先生が東京で開催されたが、その歴代学術集会の詳細については別項を参照していただきたい。

学術集会はそれまでの日本胆道疾患研究会と同様、単独で開催していたが、平成5年第29回(高田忠敬会長)から平成12年第36回(税所宏光会長)までの8年間は、日本消化器病学会関連週間(JDDW)に全面参加した。ところが、平成13年第37回(二川俊二会長)から、再度、単独で開催することになり現在に至っている。

主題と一般演題を合わせた総演題数は200題前後を推移してきたが、JDDWを離れて単独開催となった平成13年(2001年)は169題と極端に減少して

しまった(表1)。しかしながら、いろいろな努力の積み重ねがあり徐々に増加し、平成21年(2009年)第45回(竜 崇正会長)の時から300題を超え、平成25年(2013年)第49回(宮崎 勝会長)には500題を超えるまでになった。

学会組織構成

学会役員の構成について、1987年の発足当時と現状を比較してみると、種々の差があることがわかる。発足時は理事12名、監事2名、特別会員6名、評議員62名、学会員2629名といった構成であったが、現在は理事長1名、理事13名、監事2名、名誉理事長2名、名誉会員47名、特別会員27名、評議員141名、学会員数3000名となっている(表2)。評議員数は1997年から100名以内に増加され、2008年からは150名以内となった。理事の数は10~12名であったが、1997年から10~13名に、2005年から12~15名と改訂されている。

1996年に理事長制が導入された。初代理事長は有山 襄先生(順天堂大学消化器内科)で任期は1996年から2002年であった。2代目は二村雄次先生(名古屋大学第一外科)で、2002年から2008年がその任期で、第42回(藤田直孝会長)から理事長講演が行われるようになった。2008年から3代目理事長を務められた近藤 哲先生(北海道大学腫瘍外科)は2009年の理事長講演で胆道学会の方向性について熱く語られ、まさに新しい時代を切り開こうとしていた矢先、2010年、ご病気のため勇退された。その後を託された私は近藤前理事長の遺志を受け継ぎ、胆道学会の発展を通じて社会貢献、国際貢献に寄与すべく現在に至っている。

表1 日本胆道学会学術集会における総演題数の推移

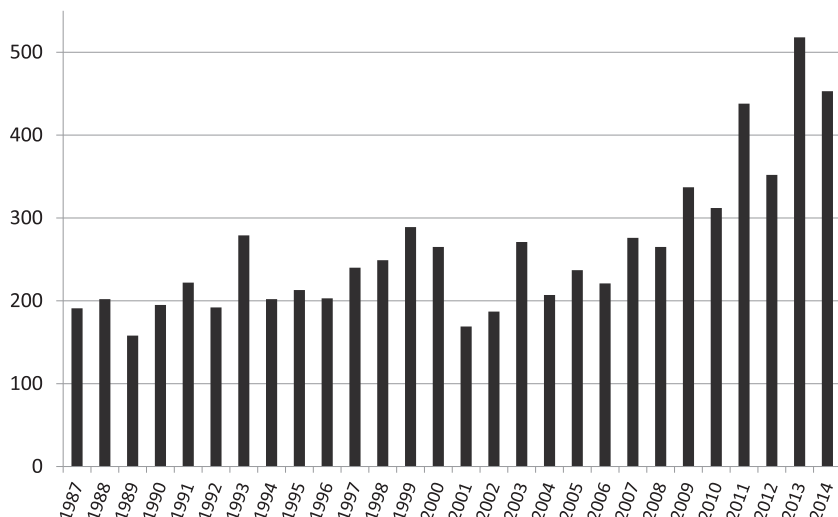


表2 日本胆道学会役員構成の学会発足時と現在の比較

	1987 年	2014 年 12 月
名誉理事長	—	2
名誉会員	—	47
特別会員	6	27
理事長	—	1
理事	12 (会長・副会長含)	13
監事	2	2
評議員	62	146
学会員	2,629	3,097

会員数の推移

学会員数は当初の2629名から徐々に増加していたが、1996年をピークに減少に転じた(表3)。1996年当時はJDDWに全面参加をしていた時期であるが、総演題数の増加(表1)とは逆に、会員数は減少するという皮肉な事態に陥っていた。これは、胆道学会の独自性と存在意義が失われかけていたのかもしれない。

いったん落ち込んだ会員数はJDDWからの離脱後も回復せず、2007年まで低迷を続けたため、理事会では何とか打開しようと議論を続けた。そのうちの一つに前述した評議員数の増加があった。2007年に臨時評議員会が開催され2008年から施行されたが、この時から徐々に増加する機運が高まってきた。

た。その他にも後述する胆道学会機関誌「胆道」の充実化とオンライン化、学術委員会を中心とした学会主導の研究、認定指導医制度の導入などの改革が行われた結果、現在では3000名を超えるようになった。なお、地区別にみた会員数について発足時と比較してみると、北海道、千葉県、広島県、福岡県などでの増加が著しい(表4)。

機関誌「胆道」の改革

機関誌はその学会の活動状況のバロメーターである。歴代の編集委員長を列記すると、1巻1号～6巻4号(1987～1992年)が故菅田文夫先生(昭和大学藤が丘病院内科)、6巻5号～9巻5号(1992～1995年)が有山 襄先生(順天堂大学消化器内科)、10巻1

表3 日本胆道学会会員数の推移（2014年12月現在）

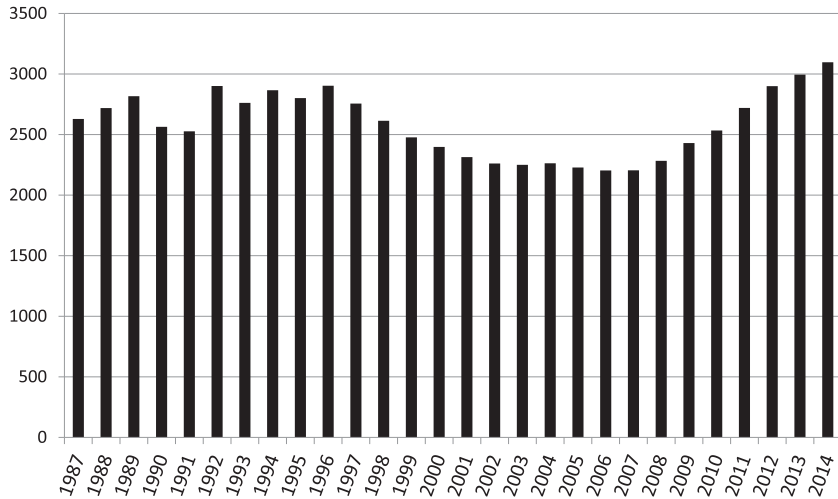


表4 日本胆道学会の地区別にみた会員数（2014年12月）

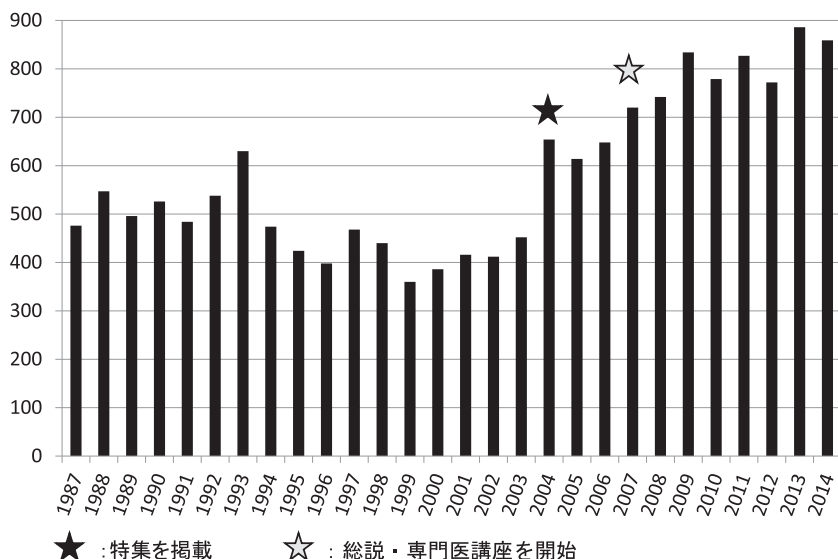
	1987年	2014年		1987年	2014年		1987年	2014年
北海道	124	184	石川	66	37	岡山	43	47
青森	33	30	福井	27	18	広島	41	110
岩手	20	17	山梨	14	27	山口	24	17
宮城	64	66	長野	23	41	徳島	17	14
秋田	31	19	岐阜	63	55	香川	12	29
山形	17	40	静岡	61	89	愛媛	29	20
福島	21	28	愛知	265	227	高知	17	13
茨城	45	80	三重	73	45	福岡	93	170
栃木	51	63	滋賀	17	26	佐賀	22	9
群馬	23	33	京都	98	53	長崎	65	46
埼玉	38	87	大阪	178	188	熊本	17	38
千葉	98	189	兵庫	91	106	大分	4	19
東京	409	418	奈良	20	22	宮崎	10	34
神奈川	144	165	和歌山	14	15	鹿児島	37	44
新潟	40	43	鳥取	4	17	沖縄	6	21
富山	14	24	島根	6	13	韓国	0	1

号～12巻2号（1996～1998年）が故土屋幸浩先生（千葉大学第一内科）、12巻3号～14巻5号（1998～1999年）が大井 至先生（東京女子医科大学消化器内科）、15巻1号～19巻5号（2000～2005年）が角田 司先生（川崎医科大学外科）、20巻1号～24巻1号（2006～2010年）が私（藤田保健衛生大学坂文種報徳會病院消化器内科）、25巻1号～28巻5号（2011～2014年）が田妻 進先生（広島大学病院総合内科・総合診療科）で、29巻1号からは五十

嵐良典先生（東邦大学医療センター大森病院消化器内科）が担当する。

「胆道」の主な改革としては、1977年に「胆道」掲載を評議員資格に必須としたこと、2007年に出版社と表装を変更し、2008年に一般公募したロゴマークを採用したこと、2009年にJ-STAGE（電子ジャーナル）に掲載しオンライン化を実現したこと、2010年に肝胆膵外科学会の機関誌JHBPSを公式英文誌に採用したことである。

表5 「胆道」における総頁数の推移



「胆道」の年間総頁数の推移をみると、学術集会の演題数による増加も含まれるが、1時期（JDDWに参加していた期間？）の低迷から2004年から特集や2007年からの総説、専門医講座などの企画を打ち出した成果が表れていると考えられる（表5）。

指導医について

学会は本来、国民の福祉に貢献する必要がある。一方、現代社会においては根拠のない宣伝や情報が氾濫しているため、正確で信頼できる情報を学会が主導して発信する必要がある。いま、国を挙げて専門医の在り方について議論されているが、学会のためのものではない、誰もが認める専門医を育てる必要がある。このようなコンセプトのもと、2010年から学会認定指導医制度を導入した。なお、この指導医制度の導入にあたっては五十嵐理事と田妻理事のリーダーシップによる賜物であったことを述べておきたい。

本学会の構成員は内科と外科、放射線科、病理など広い領域にわたっている。そこで、専門カテゴリーを内視鏡診断治療、経皮経肝の診断治療、癌薬物治

療、胆石・良性疾病外科治療、癌外科治療、放射線診断、癌放射線治療、病理診断の8つに分けて認定している。現在、内視鏡診断治療232名、経皮経肝の診断治療194名、癌薬物治療226名、胆石・良性疾病外科治療170名、癌外科治療185名、病理診断3名の計420名（重複あり）が認定されている。

もちろん、指導医制度は国民のためであり、今後より良い制度となるべく改善していくが、副次的効果として胆道のプロを目指す若手にとっての良い努力目標となっていることも確かである。今後も若手医師・研究者の指導・教育の充実を図る努力を続けたい。

おわりに

今後、学会として取り組むべき課題として、学会主導での新しい研究の創出、学術集会での討論の活発化・国際化、委員会活動の見直し・組織編成などがあげられる。次の50年に向けた土台作りをさらに強固なものにし、次世代に受け継がれていかれることを期待している。